

『萬葉集』の「をつづ／をつつ」と「うつつ（現）」

佐佐木 隆

一

「をつづ」あるいは「をつつ」という語が、『萬葉集』にだけ四例見える。どちらの語形も、「うつつ（現）」と同源・同義の語だと説明されることが多い。本稿では、そうした説明の適否について検討するとともに、この語の内部構成はどのようなものであり、またこの語は具体的にどのような意味をもつものなのか、などの点について私見を述べる。

初出の「をつづ／をつつ」は、山上憶良の「鎮懐石を詠む歌一首短歌を併せたり」（巻第五目録）のうち、長歌の末尾に見えるものである。

1 かけまくは あやに恐し^{かしこ}し 足日女^{たらしひめ} 神の命^{みこと} 韓国^{からくに}を 向け平らげて 御心^{みこころ}を 鎮め^{しづ}給ふと い取らして 齋^{いは}ひ

『萬葉集』の「をつづ／をつつ」と「うつつ（現）」（佐佐木）

『萬葉集』の「をつづ／をつつ」と「うつつ（現）」（佐佐木）

七八

給ひし 真玉なす 二つの石を 世の人に 示し給ひて 万代に 言ひ継ぐがねと 海の底 沖つ深江の 海上
の子負の原に 御手づから 置かし給ひて 神ながら 神さびいます 奇し御魂 今の遠都豆に 尊きろかむ

（五・八三）

2 天地の 共に久しく 言ひ継げと この奇し御魂 敷かしけらしも

（五・八四）

この二首の直前に置かれた序には、

往者、息長足日女命、新羅国を征討し給ひし時に、この兩つの石を用ちて、御袖の中に挿著みて、鎮懐と為し給ひき。

とある。また、右の1の歌には「韓国を向け平らげて、御心を鎮め給ふと…」とある。息長足日女命つまり神功皇后が、袖の中に挟むことよって心を落ち着かせようとしたという「二つの石」が、二首それぞれの中で「奇し御魂」と呼ばれている「鎮壊石」である。その「二つの石」は、「今の遠都豆に」尊く存在しているという。二首には左注も付されていて、そこに「右の事を伝へ言ふは、那珂郡伊知郷養嶋の人建部牛麻呂これなり」という説明がある。

『古事記』『日本書紀』や、『釈日本紀』所引の『筑前国風土記』などでは、皇后は自分の出産を後日に延ばすために石を腰に挟んだと説明している。しかし、石を腰に挟んで出産を延ばしたという意味のことは、1・2の二首の歌句には見えない。それは、生々しい表現は歌に不適切だと判断したうえで措置かと思われる。

ただし、序の「…鎮懐と為し給ひき」という記述の直後に、小字による「実はこれ御裳の中なり」という説明が挿

入されている。それは、建部牛麻呂の伝えた内容に対して、歌の作者である憶良が別の記録を重んじて加えた説明だろうと言われる。

四例の「をつづ／をつつ」のうち、残る三例はどれも大伴家持の長歌に見えるものである。古語に関心の強い家持が憶良の表現を学び、自分の歌にも用いたのだろうと推測されている。

3 射水川いみづがは い行き巡めぐれる 玉くしげ 二上山は…古いにしへゆ 今の乎都豆うづまに かくしこそ 見る人ごとに かけて
しのはめ 〔七・三六五〕

4 大伴の 遠かむおやつ神祖かむおやの その名をば 大久米主おほくめぬしと 負おひ持ちて 仕つかへし官かみ…大夫ますらをの 清あきその名を 古いにしへよ
今の乎追通うづとみに 流ながさへる 親おやの子等こどもそ… 〔一六・四〇九四〕

5 天皇すめらみの 敷すきます国くにの 天あまの下 四方よもの道みちには 馬うまの爪つめ いい尽くす極たぎみ 舟ふねの舳への いい泊はつるまでに 古いにしへよ
今の乎都頭うづつもとに 万調よろづよ 奉まもるつかさと 作つくりたる その生業なまはひを 雨降あめふらず 日ひの重おもなれば… 〔一八・四三三〕

三首の文脈の中で「をつづ／をつつ」がどのように用いられているかをよく見ると、ある物やことがらが遠い過去から現在まで存続していることを述べるために、「古へゆ／古へよ」に「今をつづに／今をつつに」を続けるかたちに仕立てられている。しかし、さきの1の歌には、「古へゆ／古へよ」が用いられていない。もともとは「今をつづに／今をつつに」だけで用いられて問題はなかったが、家持が右の三首を詠んだ時期には「古へゆ／古へよ」を伴わなければその語義が把握しにくくなっていた、ということだろうか。

二

「うつつ」という語と同源であり同義だ、と一般に説明されることの多い「をつづ／をつつ」だが、これらが専門的な辞書や『萬葉集』の注釈でどのように説明されているかを、参考までに見てみる。

まず、『時代別国語大辞典上代編』（三省堂）では項目を「をつづ」とし、「ウツツと通じる語で、現在の意であろう」と解説している。さらに、同書の「考」の欄では、「ヲは、息ノ緒・年ノ緒のヲで継続するものの意、ツツは綴ル・続クなどと同根の語か」と述べている。

『岩波古語辞典』の「をつつ」の項目には「うつつ」の転とあるだけで、語義は説明していない。しかし、「下に助詞「に」がきて「をつづに」と濁ることもある」という解説を付し、末尾音節の清濁の相違に言及している。『日本国語大辞典』（小学館、第二版）では、「おつつ」の項目に「（うつつ（現））」と同源語。上代「に」に続くときは「をつづに」と下の「つ」は濁音化したといわれる。今。現在。現実。うつつ。」とある。末尾音節の清濁に関する解説は、『岩波古語辞典』の解説を取り入れたものである。

『古語大辞典』（小学館）には、「をつづ」の項目に「現在の意か」とあり、「語誌」の欄で通説を紹介したうえで「うつつ」と意味の上で通じるところがあるが、別語であろう」と述べている。また、『角川古語大辞典』の「をつつ」の項目には、「今。現在。「うつつ」と通ずる語か」とあり、さらに「をつづ」で、緒統（綴）の意、今の世代を表すという解釈もある」とも付記している。「うつつ」との語源的な関係について、「…か」という疑問付きで紹介・解説している点に注意される。

次に、比較的新しい『萬葉集』の注釈の、1の「遠都豆」に関する説明を見てみる。新編日本古典文学全集では、「今の現」に「眼前の事実。ヨッツはウッツの転か」という注を付し、新日本古典文学大系でも「今のうつつ（現）」の転であろう」と述べている。また、和歌文学大系では、「ヨッツはウッツと同じく現在を表す名詞。ヨッツと訓む説もあるが、原文の「豆」は濁音ツに宛てられているようだ」と説明している。『万葉集全解』では「ヨッツ」は、「ウッツ」に同じ」と述べ、『萬葉集全歌講義』では右に引用した『古語大辞典』の解説と『岩波古語辞典』のそれを引用し、「後説が適切か」と述べている。

このように、最近の注釈のほとんどは、四例を「今の現／今の現」と表記しながら、「うつつ」と語源的関係があるかどうかについては、辞書の場合と同様に断定を避けている。

『時代別国語大辞典上代編』の「ヲは、息ノ緒・年ノ緒のヲで継続するもの意、ツツは綴ル・続クなどと同根の語か」という解説と、『角川古語大辞典』の「ををつづ」で、緒統（綴）の意、今の世代を表すという解釈もある」という解説は、武田祐吉の論を意識したものである。その武田の論によれば、「ををつづ」を「うつつ」と同源の語だと見ることには不安があるという。そして、「ををつづ」の「を」は、

6 天皇の 遠き御代にも おし照る 難波の国に 天の下 知らしめしきと 伊麻能乎尔 絶えず言ひつつ か
けまくも あやに恐し…
〔二十・四三六〕

という歌に見える、「今の緒」の「緒」と同じ語だと述べる。また、それは「玉の緒」「紐の緒」「気の緒」などのそれとも同じであって、どの「緒」も長く続くものだから、「今の緒」も継続性を表すものだろうという。その「緒」

『萬葉集』の「ををつづ／をつつ」と「うつつ（現）」（佐佐木）

に、「続く」「綴る」などの「つづ」の接したものが「をつづ」だと考えられるから、「今のをつづ」は「今の時代」などの訳語があてはまるのではないか、というのである。この論は、問題の「今のをつづ」と「今の緒」との意味的な対応や用法の類似性に注目した点で、きわめて興味深いものである。

今度は、「をつづ／をつつ」と同源・同義だという「うつつ」について見てみる。この語は、形容詞「顕し」と同源の「うつ」が反復された疊語であり、それが三音節に縮約したものだと言明されることが多い。さきにあげた辞書でも、ほとんどがそのように解説している。妥当な推定だろう。

「うつつ」は『萬葉集』に十八例ある。それらのうち五例を次にあげる【7〜10はどれも短歌だが、11は長歌の間部分である】。

- 7 打乍二波 更にもえ言はじ 夢にだに 妹が手本を まき寝とし見ば (四・七六四)
- 8 夢のわだ 言にしありけり 寤毛 見て来るものを 思ひし思へば (七・一三三)
- 9 摺り衣 着りと夢に見つ 寤者 いづれの人の 言か繁けむ (十一・六三二)
- 10 得管二毛 今も見てしか 夢のみに 手本まき寝と 見れば苦しも (十一・二六八)
- 11 起きたへの 袖返しつつ 寝る夜落ちず 夢には見れど 宇都追尔之 直にあらねば 恋しけく 千重に積もりぬ… (十一・二六八)

右のどの「うつつ」も「夢」と対比的に詠み込まれており、それは全十八例のうち十七例に及ぶ。唯一の例外は、

12 住吉の 小集せづめ樂に出でて 寤毛うつとも 己妻おのつますらを 鏡と見つも

〔十六・三六〇〕

という歌である。しかし、この歌では、夢ではなく目が覚めた状態でも、実際に自分の妻を鏡のようにすばらしい女性だと見た、という状況を述べている。「夢」という語は歌句に現れていないが、表現の背景では「夢」が強く意識されている。

「うつつ」が「夢」と対比的に詠み込まれているのは、言うまでもなくきわめて顕著な特徴である。ほかに、十例の「うつつ」が歌の第一句に詠み込まれていることも明瞭な特徴だと言える。さらにまた、7〜10の歌の構成と同様に、「うつつ」のすぐあとで表現がひとまず終止するものが十三例に及ぶのも、顕著な特徴の一つである。

他方の「をつづ／をつつ」は、四例とも「今の——に」というかたちでしか使われず、しかも、特定の物やことがらが過去から現在までずっと存続していることを、高い価値のあるものとして提示する文脈に現れる。「うつつ」との類似点や共通点は、音形が類似すること以外には見あたらない。だから、『万葉集全解』のように「ヲツツ」は、「ウツツ」に同じ（既出）とだけ説明して済ませられるものではないはずである。

かりに「をつづ／をつつ」と「うつつ」の語源が同じだったとしても、実際の用法に右のような大きな相違があることを確認すると、両語はまったくの別語として扱うしかない。断定することはできないが、おそらく両語の間に語源上の関係はなく、他人の空似とでも言うべきものだろう。「をつづ」について、『古語大辞典』（小学館）の解説に「うつつ」と意味の上で通じるところがあるが、別語であろう」（既出）とあるのが、客観的で妥当である。

三

問題の語は「をつづ」か「をつつ」か。語末の清濁について、それぞれの歌に用いられている万葉仮名を見て確認しておかなければならない。

1 の長歌の本文をあげる。

1 可既麻久波 阿夜尔可斯故斯 多良志比咩 可尾能弥許等 可良久尔遠 武氣多比良宜弓 弥許々呂遠 斯豆
迷多麻布等 伊刀良斯弓 伊波比多麻比斯 麻多麻奈須 布多都能伊斯乎 世人尔 斯咩斯多麻比弓 余呂豆。余
尔 伊比都具可祢等 和多能曾許 意积都布可延乃 宇奈可美乃 故布乃波良尔 美弓豆。可良 意可志多麻比弓
可武奈何良 可武佐備伊麻須久 志美多麻 伊麻能遠都豆尔 多布刀伎呂可儻

この歌ではツに「都」を用い、ツに「豆」を用いて、次のように清濁を截然と書き分けていることが確認できる。

都 …… 二つの石を 言ひつぐがねと 沖つ深江の
豆 …… しづめ給ふと よろづ代に 御手づから

2 の短歌には、

2 阿米都知能 等母尔比佐斯久 伊比都夏等 許能久斯美多麻 志可志家良斯母

のように二つのツしかなく、ヅは現れない。

都……あめつちの 言ひつげと

長歌と短歌の表記のありかたから判断すると、1に用いられた問題の「遠都豆」は「をつづ」である。

家持が用いた三例の清濁はどうか。3は「二上山賦一首」という長歌であり、その題詞には「此山者有射水郡也」という注が付されており、長歌には二首の短歌が添えてある。しかし、長歌に「射水川」の意の「伊美都河泊」と、当該の「乎都豆」とが見えるほかには、ツ・ヅの仮名が現れない。前者の「都」はヅにあてられているが、ツ・ヅの仮名がひどく少ないこの歌群の範囲では、後者の「乎都豆」の清濁は明確ではない。ただ、『萬葉集』全体では、「豆」は一般に濁音にあてられる仮名であり、清音にあてられた確実な例がほとんどない仮名だから、ここも「をつづ」である可能性がきわめて高い。

4の長歌には「賀陸奥国出金詔書歌一首并短歌」という題詞があり、三首の短歌が添えてある。長歌と短歌を合わせて、「乎追通」のほかには十二のツと四例のヅが現れる。

都……広みあつみと たてまつる つくしもかねつ まつろへの 遠つ神祖の つかへし官みづく屍まつ

『萬葉集』の「をつづ／をつつ」と「うつつ（現）」（佐佐木）

『萬葉集』の「をつづ／をつつ」と「うつつ（現）」（佐佐木）

八六

ろふものと 言ひつげる ことのつかさそ 奥つきは

追 …… 遠つ神祖の

豆 …… みづほの国を 神あひうづなひ

頭 …… あづまなる

「都」には、これをツにあてた「みづく屍」という例が一つあるが、ほかの十一例の「都」はみなツにあてられている。「乎追通」の「通」は、この歌群にはほかに用例がないから、厳密にはツだともツだとも決められない。しかし、『萬葉集』に見える「通」の仮名は、助詞・助動詞の「つ」、枕詞の「そらみつ」「さにつらふ」、固有名詞の「松浦」、「摘み来な」などの清音ツにあてられたものしかない。だから、「乎追通」は「をつつ」を表記したものでらう。5は雨乞いの長歌であり、一首の反歌を伴っている。長歌には「乎都頭」のほかに十のツと一つのツが現れるが、反歌にはツ・ツのどちらも現れない。

都 …… 馬のつめ いくす極み いはつるまでに まつるつかさと つくりたる 天つ水 仰ぎてそ待つ わ

たつみの 沖つ宮辺に

豆 …… 天つみづ。

「頭」は「乎都頭」のほかに用いられておらず、この歌を見る限りではツかツかわからない。しかし、この仮名は、『萬葉集』全体で「束」「妖言」「霽く」「静けし」「鶴」「尋ね」その他のツにあてられており、ツにあてられた確実な

例がない。「乎都頭」は「をつづ」を表記したものでらう。

以上のように、「をつづ／をつつ」という語を含む歌群の表記を確認すると、1の「遠都豆」と5の「乎都頭」については、「をつづ」のつもりで表記したものと理解してよい。3の「乎都豆」もまた、おびただしい数の「豆」の用法から見て、「をつづ」である可能性がきわめて高い。一方、4の「乎追通」の場合は、一般的な「通」の用法から見て、清音を表記したものと判断するしかない。既に古語になっていた語の清濁に対する判断が、場合によって揺れていたのだらうか。

四

「をつづ／をつつ」は「うつつ」と同源の語だという見解も、それは「緒」と「続く」「綴る」に含まれる「つづ」との結合形だとする見解も、ともに積極的な支証のない語源説である。語源説は常にそれなりの危うさを伴うものだが、語構成のわかりにくい「をつづ／をつつ」の場合はそれもやむを得ない。本稿では、そうした危うさがあることを十分に認識したうえで、さきにあげた説とは別の語源説を提示する。

「をつづ／をつつ」の語構成について考える際に参考になるのは、「うつつ」の反復形式から「うつつ」へという縮約のありかたである。具体的に言うと、「うつつ」とは語源がまったく別の、時間的な意味を表す「遠／遠」に「をつつ」という別形があったと想定し、その反復形式である「をつつ」が三音節へと縮約したものが「をつづ／をつつ」だろう、と想定するものである。つまり、「後々の時点」「遙か未来」などの意をもつ時間的な意味の「をつつ」が縮約して「をつつ」となり、それが「過去から遠く隔たった時点」の意を表すようになったのではないか、ということ

である。反復形式だから、単なる「遠」の意ではなくその強調表現である。これは、6の「今の緒に絶えず言ひつづ」が、遠い過去から現在に至る継続性を表すものであるのと一致する。

時間的な意味を表すものとして実際に用例があるのは、「をつ」ではなく別の二種の語形である。一つは、「遠年」の意の「一昨年^{をよとし}」や「遠つ日」の意の「一昨日^{をよつひ}」などに用いられた「をと」である。後者の仮名書きの例には「平登都日」〔七・三三四〕や「平等都日」〔七・四〇二〕があるが、前者にはそれがない。実際に用例があるもう一つの語形は「をち」であり、単独で用いられた「をち」とそれが複合語を構成した「をちこち（遠近）」の例がある。

単独の「をち」には、次の三例がある。

- 13 ま玉つく 遠^{をち}をし兼ねて 思へこそ 一重の衣 一人着て寝れ
〔十三・二六五三〕
- 14 この頃は 恋^{をち}ひつつもあらむ 玉櫛^{たまくしげ} 明けて乎^{をち}知より すべ無かるべし
〔十五・三七三六〕
- 15 近くあらば 今二日だみ 遠くあらば 七日の乎^{をち}知は 過ぎめやも…
〔十七・四〇二〕

新編古典全集の説明を見ると、13の「をちをし兼ねて」は「先まで見通して」の意で、「このヲチは未来の意」である。14の「をち」も、「ここは時間的に用いて、以降、以後、を意味する用法」であり、15の「をち」も同様である。三例ともそろって時間的な意味を表す【ほかに、空間的な意味のものだが、「遠方^{をちかた}」という複合語がある】。

一方、「をちこち」という複合語は十例あり、時間的な意味にも空間的な意味にも用いられている。

- 16 ま玉つく 越^{をち}乞兼ねて 結びつる 吾が下紐の 解くる日あらめや

〔十二・二九七三〕

16の「をちこち」は、やはり新編古典全集によれば、「未来と現在」の意であり、17のそれは場所をさす「あちらこちら」の意である。ただし、十例のうちで時間的な意味に用いられた「をちこち」は、16のほかにもう一例あるのみである。

「をと」「をち」について、音韻面から見てみる。「一昨日(よつひ)」「遠つ日(とほ)」「をと」は、「平登／乎等」と表記されているから *woto* である。仮名書きの用例がない「一昨年(せととし)」「遠年(とほ)」の「をと」も、同じく *woto* だったはずである。

「をと」の異形である「をち」の場合、当時のちに *o* / *o* の書き分けはないから *woi* と表記しうるが、さらに古くは *woti* だったかも知れない。*woto* / *woti* つまり *o* / *i* の交替であれば、「昨夜 *ko:ŋo* / 昨夜 *ki:ŋo*」という類例がある。また、*woto* / *woti* つまり *o* / *i* の交替であれば、程度の甚だしさや数量の多さを表す「幾多 *ko:ŋo-da* / 幾多 *ko:ki-da*」という類例がある。

「をと」／「をち」の別形に「をつ」があったと想定する場合にも、「をと」と「をつ」との派生関係を考えるのと、「をち」と「をつ」とのそれを考えるのと、両方の想定が可能である。前者の場合には、「御もろ *mi-no:ŋo* / 御むろ *mi-nuro*」や「隠り *ku-komori-do* / 隠り *ku-komori-du*」などの類例がある。後者の場合には、「沖 *oki* / 奥 *oku*」や「退辺 *sōki-te* / 退辺 *sōku-te*」などの類例がある。このように、どちらの派生関係であっても音韻上の類例をあげることができ、「をと」「をち」に「をつ」という別形があったと想定することは不可能ではない。

「をつつ」／「をつつ」が「をつ」の反復形式に由来するのではないかという推測には、一つの形態上の根拠がある。それは、「AB」という二つの音節から成る語が反復されて「ABAB」の形式をとる場合に、その二つめのAが脱

落して結果的に「ＡＢＢ」という形式へと縮約する例が上代に少なからずある、ということである。たとえば、「白しろ櫃かじの枝えだも等と乎を々に雪の降れば」〔十・三三三〕に、「或いは云ふ」として「枝も多た和わ々た々た」という別伝が付されていて、擬態語の「たわたわ」の母音交替形である「とをとを」の縮約形が「とをを」であることを示している。つまり、「思たひ多た和わ美みて」〔六・九三〕の「たわむ」と「等と乎を乎を盾ま引ひき」〔十・四三〇〕の「とをむ」の、語幹の「たわ」「とを」が反復されたかたちである【「とをを」とパラレルな「たわたわ」は上代には例が見えないが、『古今和歌集』には「秋萩の枝もたわたわに」〔四・三三〕という例が見える】。

語が反復されて同じように縮約現象を起こした上代の例には、「とをを」のほかにも、

あそそに（薄） あららに（粗） いよよ（弥） したたに（下／確） しののに（萎）
しほほに（濡） しみみに（繁） つららに（列） にふぶに（笑） はららに（散）
ひささに（久） ひたた（纒） ゆららに（響）

などがある。中古にまで範囲を広げると、これらの類例はずっと多くなる。

表記について具体的に検討したように、四例の「をつづ／をつつ」のうち最も古い用例であるⅠは、「をつつ」ではなく「をつづ」である。末尾の音節が濁音だが、「をつ」の反復形式が縮約して、どうして末尾音節が濁音化したのか、という問題がある。しかし、右に列挙した諸例のなかに「にふぶに」があり、その実例である「二布夫尔」〔十・六三三〕や「尔布夫尔」〔十・四二二〕には濁音の「夫」が用いられている。これと同様の濁音化が、「をつ」の反復形式が縮約したものにも起こった可能性がある。あるいはまた、さきにも引用したように、『岩波古語辞典』の「をつ

つ」の項目に見える、「下に助詞「に」がきて「をつづに」と濁ることもある」という解説が妥当なのかも知れない。さらに、末尾音節が清音になっている4の「をつつ」は、音形の似ている「うつつ」への連想が働いて「をつづ」から変形したものである可能性もある。

このように、清濁の相違については三種の理解のしかたが可能である。

五

時間的な意味をもつ「をと／をち」の別形に「をつ」があり、その反復形式が縮約して「をつづ／をつつ」になったと想定した場合に、四例ある「をつづ／をつつ」は個々の文脈の中でどのような意味を表すと理解すべきか。

1の歌の表現について考えてみる。かつて神功皇后が出産を引き延ばすために「い取らして齋いはひ給」うた、「二つの石」を、皇后自身が「世の人に示し給ひて、万代に言ひ継ぐがねと」願って「子負こかの原に御手みかづから置かし給」うた。その石つまり「奇し御魂みたま」が、当時から「今のをつづに」尊くも存在し続けているという。皇后が石を置いた時から長い時を経た現在は、当時から見れば遙か遠い未来・後世であり、そのような長い時を経た、「今」という遠い未来・後世が、「遠とほ」の反復形式を含む「今のをつづ」である。皇后が「万代に」と願ったとおりに、「今という、過去から遙か遠く離れた時点まで」、「奇し御魂」がそのまま存在しているのは尊いことだ、というのである。6の歌の「今の緒に絶えず言ひつつ」もまた、長く続くものである「緒」を含むために、過去から現在までの長い時間を表現している。

しかし、一般的な説明にあるように「をつづ」が「うつつ」の転だとすれば、「今のをつづに」は単に「現在」「現

実「眼前の事実」の意でしかないはずである。「うつつ」の意であつては、「をつづ」や「緒」が表す「過去から遙か遠く離れた時点まで」という、切れずに長々と続く継続性は表しえないのである。

『萬葉集』に十八例ある「うつつ」には、「今の」を冠した用例が一つもない。それは、「うつつ」に「現在」「現実」「眼前の事実」の意しかないために、意味的に「今の」には続きえないからだろう。意味のうえで、無用の重複になるからである。「をつづ／をつつ」と「うつつ」の意味的な相違は、こうした点にもよく表れている。

3～5の歌の場合はどうか。3では、二上山とその周囲の景観を眺める人々は、それを「古へゆ今のをつづに」讚美して来たし、将来もますます褒め称えていくことだろう、と述べている。人々が二上山の景観のすばらしさをいつから現在まで讚美して来たかは表現されておらず、「古へゆ」とあるだけだが、対象が山だからそれは当然である。とにかく「古へゆ」ずっと、現在という遙か遠く隔たった時点まで、長い間にわたって人々はその景観を讚美して来た、ということである。この歌の場合には、1の表現とは異なって「古へゆ」が付加されているので、おのずから「過去から遙か遠く離れた時点まで」の意は読み取れる。

4の歌の、さきに引用した部分では、「大伴」という「清きその名」を、「古へよ今のをつづに」ずっと伝えて来た者の子孫が自分たちなのだ、と述べている。やはり「古へよ」が付加されており、大伴家の人々が現在まで天皇に仕えて来た時間の長さを確認しようとした表現である。5の歌は干魃の時に降雨を祈ったもので、人民が最高の貢ぎ物を献上するために「古へよ今のをつづに」ずっと行い続けて来たことが稲作なのだ、と述べている。この場合にも、「古へよ」があるために「過去から遙か遠く離れた現在まで」の意が明瞭に表れている。

四例の「をつづ／をつつ」のうち、最も古い1の例が「古へゆ／古へよ」を伴っておらず、より新しい3～5の三例がそれを伴うかたちになっているのは、三例が用いられた時期には、「をつづ／をつつ」が「遠」の反復形式に由

来するということが忘れられ、それが表す意味も単純なものになっていたからだろう。

本稿で述べたのは、「を^{つづ}／を^つつ」と「う^つつ」とは意味のうえでも実際の用法の面でも一致しないということと、「を^{つづ}／を^つつ」は「遠」^をの反復形式に由来すると考えられることとの、二点である。後者の想定はともかく、前者の不一致は事実として否定できないはずである。本稿の想定した語源・語構成が正鵠を射たものでないとしても、「を^{つづ}／を^つつ」と「う^つつ」とを語源面で結びつけることは回避すべきだと考える。

注

(1) 武田祐吉「いまのを^{つづ}考」『萬葉』第十七号、昭和三十年十月

(日本語日本文学科 教授)